古田史学の会・東海　　令和二年

東 海 の 古 代

第243号　2020年11月

会長　：　竹内　強
編集　：　石田泉城　　投稿先アドレス：　furutashigaku_tokai@yahoo.co.jp
ＨＰ　：　http://furutashigakutokai.g2.xrea.com/index.htm

前方後円墳の起源

名古屋市　石田 泉城

１　方円墳発祥の箸墓古墳、実は４世紀末以降の築造

通説では、前方後円墳（方円墳）の始まりは、３世紀中頃に築造された、最古の方円墳とされる箸墓古墳であり、これが古墳時代の始まりと定義され、その後日本各地に同じ形の墳墓が築造されていったものとします。(樋口康隆、寺沢薫、田中琢ら)

しかし、箸墓古墳を最古とする説は、箸墓古墳を卑弥呼の墓と想定して邪馬台国畿内説と整合性を図ろうとする意図で考えられた考古学者笠井新也の提唱であり全く科学とはほど遠い学説です。また、国立歴史民俗博物館が炭素14年代法などを使用した測定結果は３世紀中頃と報告していますが、試料によって500年もの開きがあり恣意的です。

箸墓古墳から出土した木製輪鐙はせいぜい400年頃であり、箸墓古墳は４世紀末以降の方円墳とすべきで、通説の年代は、妥当性があるとはいえないでしょう。

近年、福岡市の那珂八幡古墳（３世紀)、徳島県の萩原1号墓（３世紀）や千葉県の神門５号・４号墳（３世紀）などもっと古い方円墳がいくつも見つかっており、箸墓古墳を古墳時代の始まりとする考古学の区切り方は全く妥当ではありません。

２　発達した方円墳が突如現れることはありえない

一般的に巨大に発達した方円墳が突如現れることはありえません。

四隅突出墳の発達の過程を参考にすれば、時代と共に四隅は徐々に大きく発達したように、方円墳についても小さな方部から徐々に発達するはずです。

近年は、周溝が途切れた所を「陸橋」と名付けて方円墳の先駆けは、「陸橋付き円形周溝墓」ではないかと考えられています。

しかし、円形周溝墓から、突如、箸墓古墳のように定型化された大型方円墳は生まれないと考えるのが自然です。

３　周溝の途切れを方円墳の方部の起源とするのは問題

奈良県橿原市の瀬田遺跡で、弥生時代終末期（２世紀後半ごろ）の「陸橋付き円形周溝墓」が見つかり、近畿で発見されたということで騒がれています。

ところが、瀬田遺跡より300年ほど古い陸橋付きの周溝墓がいくつか発掘されています。たとえば、紀元前１世紀頃の徳島県徳島市の名東(みょうどう)遺跡では、形状が歪ではあるものの「陸橋付き円形周溝墓」が見つかっています。

瀬田遺跡

名東遺跡

また、北部九州では、紀元前１世紀頃の福岡県糸島市にある三雲南小路王墓が「陸橋付き方形周溝墓」です。

周溝墓の多数は方形周溝墓であり、円形周溝墓が主流ではありません。もし周溝墓から方円墳が生まれたのだとすれば、まず方形周溝墓から前方後方墳（方方墳）が生まれ、その亜流として円形周溝墓から方円墳が生まれたとすべきでしょう。したがって、円形周溝墓が方円墳の祖型で、周溝の途切れたところが前方部、本体部が円部になったという説には頷けません。

「陸橋付き周溝墓」が方円墳の祖型であるなら、方円墳の発祥は近畿ではなく、四国東部や北部九州あたりの可能性が高いことになります。ただ、私は「陸橋付き周溝墓」が方円墳の祖型とは思いません。こうした周溝墓と箸墓古墳では墳丘形状も時期もかけ離れ過ぎています。

４　方円墳の方部の祭壇説は根拠希薄

円形周溝墓の周濠を渡る通路部分では、祭祀などが行われ、その後この部分が大型化し方円墳の方部となり円墳と一体化したとするのが大勢です。

喜田貞吉や梅原末治は、前方部「祭壇付加説」、高橋健自は「玄関説」、都出比呂志や近藤義郎は弥生時代の周溝墓の道が方形壇に変化したとする「方形壇説」です。

しかし、方円墳の方部から祭祀の跡の見つかる例は稀であり、方部を祭壇などとする説は根拠希薄です。

５　方円墳には方部とは別の通路がある

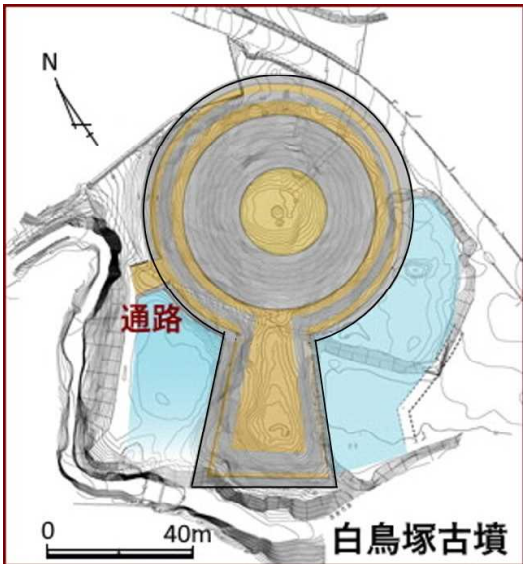
方円墳の方部は、「陸橋付き円形周溝墓」の玄関や通路が大きくなって発達したという説にも疑問が残ります。

というのも、方円墳には、方部とは別に通路部分「渡り土手」があります。

名古屋市守山区にある志段味古墳群で最も古いと考えられる白鳥塚古墳（150m、４世紀）には方部とは別に円部に直接連絡する通路があります。

この例にとどまらず、箸墓古墳（278m、４世紀末）はもとより、福岡県福岡市の那珂八幡古墳（86m、３世紀）、天理市の巨大な渋谷向山古墳（310m、５世紀）や小さな星塚１号墳（37m、６世紀）、埼玉県行田市の稲荷山古墳（120m、５世紀）など方部とは別に古墳の大小や築造時期にかかわらず、全国各地に古墳築造時に「渡り土手」が設けられた方円墳があります。

したがって、円形周溝墓の「陸橋」と方円墳の「渡り土手」との関係をどのように説明できるのかが課題でしょう。



６　弥生墳丘墓の墳形そのものが重要

方円墳の墳形について、岡本健一などによって、中国の蓬莱山を模したとか、壺であるとか、様々な説がありますが、なぜこの形になったのかはいまだに定説がありません。

大勢の学者の考えのように、「陸橋付き円形周溝墓」から、突如、墳形が整った箸墓古墳が生まれたとすると、その変化には連続性がなく疑問です。

私は、最も古い古墳とされる那珂八幡古墳が築造される以前の大型の弥生墳丘墓の形状を重視したいと思います。

７　弥生後期の大型墳丘墓は小判型

周溝墓から墳形が整った箸墓古墳への非連続性を埋める過程は、大型墳丘墓にあり、墳丘の大型化とそれに伴う墳丘高の高さにあると考えます。

弥生時代後期の墳丘墓は、墳墓であることは古墳と変わらないですが、近畿王朝が列島を統一した証とした古墳時代の古墳と区別するために弥生墳丘墓と呼ばれます。

この考古学の呼称区分は、箸墓古墳より古い古墳が発見され、また墳丘墓と古墳との違いが曖昧になっている現在では、古代史の探求を妨げる要因になっていると思います。

主に溝で墓域を区切る低丘墓の周溝墓、主に丘陵を削り出して造られた台状墓、主に盛土によって墳丘を形成した墳丘墓など、弥生墳丘墓には、それぞれ築造方法や墳丘の高低の違いはあっても、いずれも墳丘に埋葬するということに変わりはありませんし、これらの築造された時期は並行しています。弥生時代中後期になると墳丘墓は大型化し、その形状は、小判型になります。この点に注目すべきでしょう。大型墳丘墓が円形ではなく、どうして細長い楕円形の形状になっているのか、考古学者は言及されていないようです。

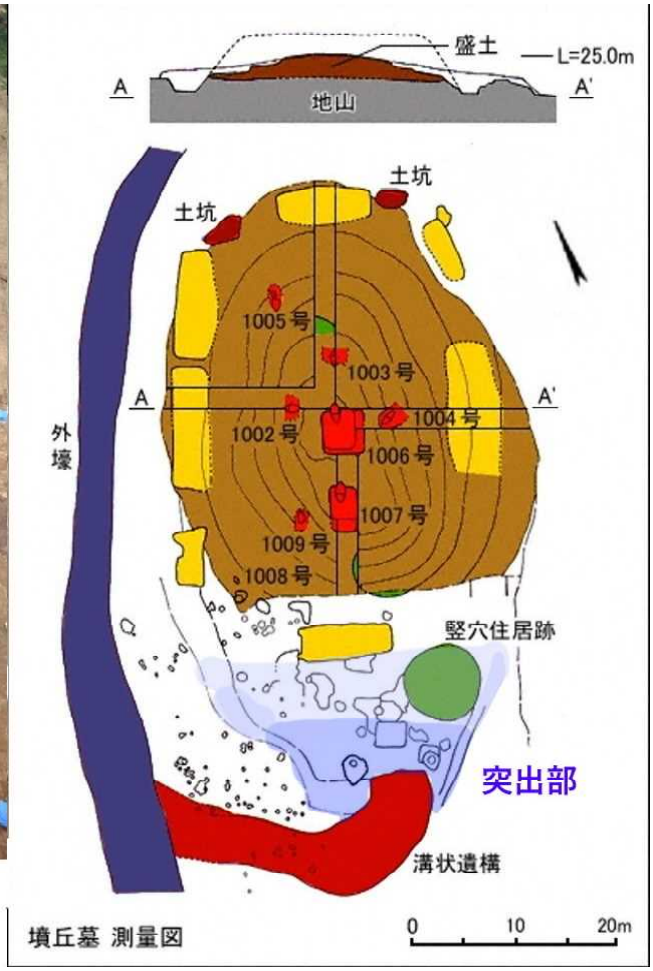
８　突出部のある吉野ヶ里遺跡の北墳丘墓

弥生時代中期に築造された吉野ヶ里遺跡の北墳丘墓は、南北約46m、東西約27m、高さ4.5m以上と推測され、隅が角張った長方形の墳丘として吉野ヶ里遺跡公園に復元されています。しかし、この復元は誤りであると思います。発掘された原形の姿は、南北に長い小判型であり、また、墳丘墓の南側は突出している様子がうかがえます。

この北墳丘墓には、頂上から墓穴を掘って14基以上の甕棺が埋納されています。甕棺を墳頂に運び、また、近親者などの関係者は墳頂に登ることになりますが、それが少なくとも14回あるわけです。

埋葬時には、上から墓穴を掘らなければなりませんし、埋葬したり葬送儀式を行うには、

当然ですが墳丘の上へ登らなければいけません。
　平原遺跡のように墳丘が２ｍ程度の低丘のうちは緩やかな傾斜でしょうから特別な構造が無くても墳頂に上ることが可能です。しかし、北墳丘墓のように墳丘の高さが高くなるにつれて、そこへ上がるための工夫が必要になります。
　北墳丘墓の原形は、吉野ヶ里遺跡公園の復元のような長方形では決してありません。
　ご覧のとおりです。



　復元された北墳丘墓は、次の左の写真のとおりで急傾斜の形状で登れません。
　実際には墳頂に登ることができる構造に造る必要がありますから、容易に登頂できるように坂道が設けられていたはずだと私は考えます。
　登頂容易な形を想像すると、おおかた右のイメージ図のように、突出部である登り口と共に、スロープを設けるために細長い形状の墳丘になっていると思われます。

　北墳丘墓は、見晴らしの良い場所に土を盛り上げ、その内部に甕棺や木棺などを埋葬し

ており、その南側には、墓道と呼ばれる通路があります。この墓道は、北墳丘墓の突出部と繋がっています。

突出部に当たる部分には竪穴住居の遺構があるために墳丘の詳細はわかりませんが、墓道から墳丘墓の突出部に着いて、そこで道が途切れるのではなく、さらに突出部を登り口として、そこから墳丘の上に登る坂道に繋がっていたと考えられます。

もし、私の考えが正しければ、方円墳の方部が生まれたのは、高さのある墳丘に上りやすいように登り口と坂道を設けたのが始まりです。

そして墳丘の大型化に伴い、この突出部と坂道が発達していき、大きく装飾化された方部を持つ方円墳になったと考えます。

９　重要で不思議な墳丘墓

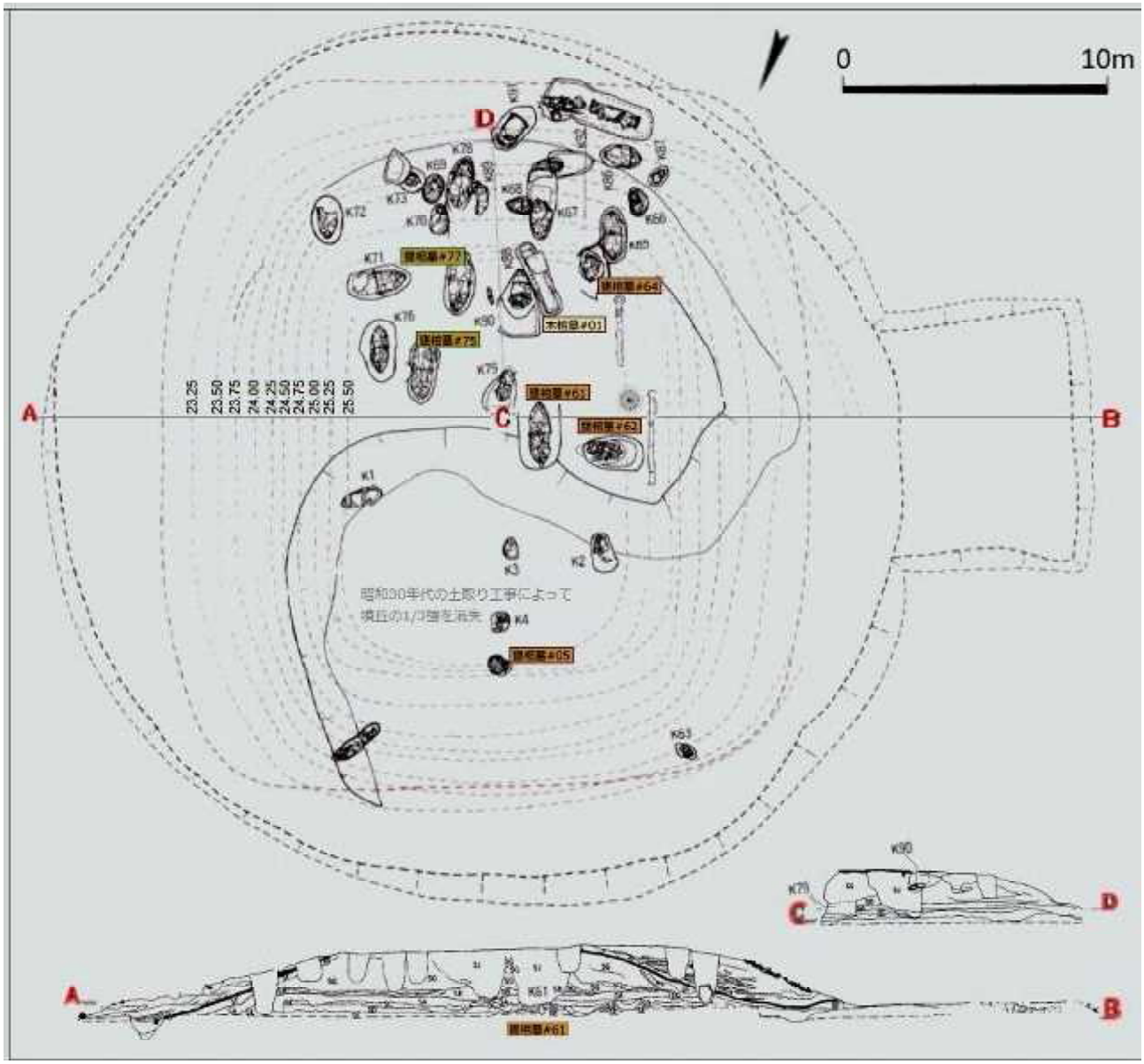
福岡市西区の吉武高木遺跡にある樋渡古墳は、上層の「帆立貝形古墳」と下層の「弥生墳丘墓」が重複しているたいへん特徴的な遺跡です。上層には方部が極端に短い古墳があり、その下層から紀元前１世紀ごろとされる弥生墳丘墓が見つかっています。

この下層の墳丘墓は南北約26.8m、東西約24.5mの隅丸長方形となっています。写真の中央にあるのが、下層の墳丘墓です。

帆立貝形古墳は、古墳出現前後の３世紀とされる古墳と、近畿王朝の造墓規制によって方円墳として築造が許されなかったという考えで５世紀の古墳とする２つに区分されます。そして帆立貝形古墳のほとんどが５世紀に位置づけられており、樋渡古墳も後者のものということで５世紀の築造とされます。

ただし、帆立貝形古墳の形状・規模は様々であり、一概にひとくくりにしてよいものか疑問に思います。宮崎県の西都原古墳群の男狭穂塚古墳は、５世紀の築造とされ、推定墳長176m、円部132mであり、墳長に対する円部の割合は、75%です。確かに方部は短めですが、この巨大な古墳を帆立貝形古墳として方円墳と区別するのはいかがなものでしょうか。すぐ南側には同じ大きさの女狭穂塚古墳（墳長176m、円部96m、54%）があり、西都原古墳群の中で男狭穂塚古墳だけが近畿王朝に方円墳の造墓を規制されていたとは思われません。

樋渡古墳は墳長39m（円部32m、方部7m）で方部が非常に小さく、円部の割合は、82%です。私は、樋渡古墳は、那珂八幡古墳に繋がる、３世紀以前の墳丘墓ではなかろうかと思っています。



というのも発掘調査では、下層の弥生墳丘墓からは甕棺30基・木棺１基・石棺１基とともに実用品として研磨された細型銅剣や鉄剣が出土しています。これに対して土取りされ

たところから長さ30ｃｍ、幅５ｃｍの幅広の銅剣が発見されています。この銅剣は、下層の弥生墳丘墓のものと推定されています。

ところが、福岡県春日市の須玖岡本遺跡にある弥生時代後期（１世紀）の御陵（ごりょう）遺跡から、樋渡古墳の銅剣と同じタイプの銅剣を鋳造する石製鋳型が出土しています。出土した鋳型の銅剣部分は、長さ30ｃｍ、幅５ｃｍです。

つまり、この石製鋳型は１世紀のものであり、下層の樋渡墳丘墓は紀元前１世紀のものと考えられていますので、この銅剣が、この鋳型から造られたとすれば、下層の墳丘墓から出土するはずはなく、上層の帆立貝形古墳のものです。

したがって、上層の帆立貝形古墳は、通説の５世紀ではなく、もっと早い時期、石製鋳型の１世紀から古墳出現前後の３世紀までの時期のものではないかと考えられ、この樋渡古墳は、古墳出現前後の帆立貝形古墳、もしくは弥生後期の墳丘墓と考えられるのです。

また、奈良県桜井市のホケノ山古墳は、方部が未発達で、その出土遺物から３世紀中頃の築造とされているものの、木槨の木材の炭素年代測定の結果、４世紀前半を含むと報告（奈良県立橿原考古学研究所編の『ホケノ山古墳の研究』、六一書房、2008年）されています。したがって、概ね400年前後と考えてよいでしょう。

ホケノ山古墳は、墳長約80ｍ（円部約55～60ｍ）で墳長に対する円部の割合は、69％～75％です。これと比べると樋渡古墳は82％です。樋渡古墳は、そのホケノ山古墳よりもさらに方部が小さく古式と考えられますので、３世紀中頃の初期古墳に至るまでに造成された墳墓と考えられます。

１０　弥生墳丘墓から方円墳の過渡期の古墳

方円墳の最も古い段階（３世紀後半）のものは、北部九州・四国・近畿にあるとされます。中でも最も古いものは、北部九州の那珂八幡古墳（福岡市博多区）で、出土した土器などから、３世紀の弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけての弥生墳丘墓から方円墳への過渡期に築造された古墳と考えられます。

その形状は、従来、「全長：後円部径：前方部長」の比率が「３：２：１」の纒向型古墳であって、近畿王朝の影響下にある古墳とされてきましたが、新たな調査により那珂八幡古墳（全長86ｍ、円部48ｍ、方部38ｍ）は、纒向型とは違い「９：５：４」（３：1.67：1.33）の比率であることが判明しました。

箸墓古墳（全長282ｍ、円部は径157ｍ、方部125ｍ）は、「９：５：４」であり、築造時期からして那珂八幡古墳の影響を受けて、その形状を引き継ぎながら大型化しています。

通説では箸墓古墳が方円墳の始まりなので那珂八幡古墳が箸墓古墳の模倣であるとされますが、箸墓古墳は、那珂八幡古墳より後代であり、纒向型古墳とは異なる技術者集団のノウハウや設計により築造されたものと考えられます。

１１　「竪穴系横口式石室」と日本最古の「横穴式石室」

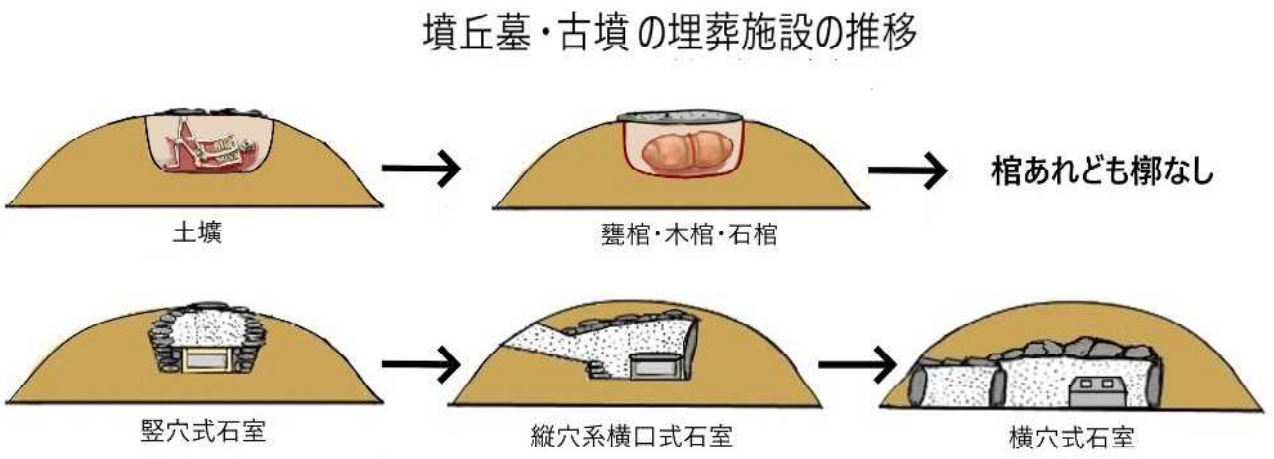
埋葬施設についても、北部九州が発祥です。

横口式石室のある古墳の最も初期のものは、福岡市の老司古墳（90ｍ、４世紀）です。

老司古墳は、竪穴式石室に横からの入口を取り付けた「竪穴系横口式石室」であり、「竪穴式石室」から「横穴式石室」に大きく変わる過渡期の古墳です。

また、福岡市の鍬崎古墳（62ｍ、４世紀）は、日本最古の横穴式石室の古墳で、このスタイルが九州全体に広がっていきます。

そして、５世紀以降には、近畿や関東地方を始めとする全国各地、さらに朝鮮半島で導入されており、横穴式石室の発祥はやはり北部九州にあります。



泉城作成

１２　まとめ

以上のことから、方円墳は、低丘の「陸橋付き円形周溝墓」から生まれたと考えるより、大型化し高く盛土した墳丘墓から発達したと考えるのが妥当です。

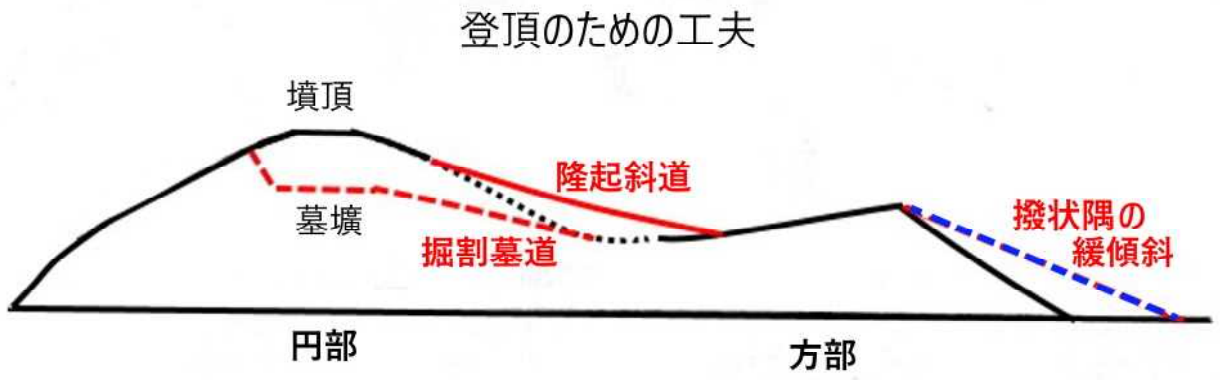
竪穴式石室の場合には、方円墳の円部において墳頂から埋葬し、また祭祀を行う場所として、その墳頂は人が集まることができるように平坦になっています。しかし、方円墳の円部の墳丘は、低丘の円形周溝墓に比べ高くなり、その斜面は急で葺き石が設けられ、裾から簡単に登ることができないように造られます。また、くびれ部や前方部の斜面も急勾配で簡単には登れません。しかし、方部を撥状に開くことで左右の隅の傾斜を緩くし葬儀の参列者などが墳頂に登るための工夫がされています（近藤義郎）。方部の隅から登り円部へは隆起斜道（りゅうきしゃどう）により墳頂に至ることができるようになっています。

また、縦穴系横口式石室の場合は円部の斜面の途中に墓壙があるので、ここに達するのに容易なように掘割墓道（ほりわりぼどう）が設けられています。

このような方円墳の構造を認識すれば、吉野ヶ里遺跡の北墳丘墓について、隅が角張った長方形の急斜面の墳丘とするのは、参列者が複数回、墳頂に登るという意識を全く理解されていない「復元」と思います。

吉武高木遺跡の樋渡古墳など、古墳時代草創期の帆立貝形古墳は、突出部のある弥生墳丘墓の形状を引き継いでいます。墳頂に至る登り口や傾斜緩和のために墳丘墓の突出部や帆立貝形古墳に小さな方部が設けられたのが、方円墳の方部の始まりと考えます。

また、多くの遺跡の発掘状況を鑑みるに、方円墳は、近畿や朝鮮半島が発祥ではなく、北部九州から始まり、その埋葬文化は日本列島や朝鮮半島に広く普及したと私は思います。（奥野正男：古墳の起源は九州）



（websiteの写真・図を一部修正して利用させていただきました。）

初期前方後円墳と九州王権

一宮市　畑田 寿一

通説では「**前方後円墳は３世紀中頃に登場して、ヤマト政権の地方への進出に伴い広がった。九州では北西部の豊国が最も早く、３世紀の後半には豊前石塚山古墳が造られた。**」としている。この説に従えば九州王権は少なくても４世紀にはヤマト王権の支配下に入ったことになるが、どこまで真実であるか疑問が残る。

今回は豊前石塚山古墳を中心にヤマトとの関係を眺めてみたい。

＜北九州の初期古墳＞

１　纒向型前方後円墳

奈良県立橿原考古学研究所の寺沢薫氏は初期の前方後円墳の内、畿内の古墳に似た特徴（帆立貝型形状、竪穴式石槨、畿内式土器）を持つ古墳を纒向型前方後円墳と名付けて分類した。

その主なものを列記すると次の様になる。(出典:Wikipediaに追記)

時　期	古　墳　名	規模（m）	所在地	出土品
庄内式３C前	纒向石塚古墳	９６	大和	弧紋円盤
“　３C中	神門４号墳	４９	上総	ガラス玉
“　３C前	萩原１号墳	２７	阿波	画文帯神獣鏡
“　４C初	宮山天望古墳	５５	備中	剣、刀、有稜鏃
布留式４C前	中山茶臼山古墳	１０５	備前	
“　４C中	原口古墳	８０	筑前	三角縁神獣鏡
“　３C中	那珂八幡古墳	７５	筑前	三角縁神獣鏡
“　４C前	端陵	５４	薩摩	
“　４C末	浅間山	１７１	毛野	円型埴輪

上記の古墳がヤマトの進出に拠るものとすれば、４世紀中頃にはヤマト王権は全国に影響力を及ぼしていたことになる。しかし、時期、類似性、発展化過程などについては諸説があり、定説にはなっていない。

なお、九州の那珂八幡古墳については、最近の発掘調査の結果、前方と後方の比率が纒向遺跡と異なることが判明して、九州では独自の形の古墳が造られた可能性が示唆されている。

２　豊前の古墳

『筑紫政権からヤマト政権へ』（長嶺正秀著、新泉社、2020年）の中で、著者は**「豊前地方は古くは九州王権の一員であったが、瀬戸内海の西に端に位置している関係から最も早くヤマト王権の影響を受けた。」**としている。

長嶺氏は、この地の代表的な古墳を次の様に位置付けている。

（１）豊前石塚山古墳

豊前石塚山古墳は福岡県京都郡にあり周防灘に面して瀬戸内海の西の端に位置する。古墳は３世紀末に構築されたが、前述の長嶺氏は、定型化した形状、竪穴式石槨、三角縁神獣鏡から、前述の纒向型古墳ほど似ていないが、畿内文化を色濃く持つ古墳とし、ヤマト王朝が九州へ影響を及ぼした初期の古墳と位置付けている。

主な出土品は次のとおり。

種類	出　土　品	備　　考
銅鏡	三角縁神獣鏡など８面	記録では計１５面
装身具	勾玉１、管玉３	ネックレスの一部？
武具	小札皮綴冑残欠、矢入れ	中国製冑
武器	素環頭太刀、銅鏃、鉄鏃	
工具	鉄斧、ヤリカンナ	
土器	複合口縁壺、高杯、タコ壺	古墳上での祭礼用

① 出土した三角縁神獣鏡（舶載）の同范鏡は、西は北九州、東は尾張にまで及んでおり、著者はヤマト王朝の威信財と位置付けている。

出土銅鏡	種　類	同　范　の　古　墳
１，２号鏡	文帯三神三獣鏡	椿井大塚山古墳（大和）赤塚古墳（豊前）
４号鏡	文帯四神四獣鏡	黒塚古墳（大和）
５号鏡	同上	同上、新山古墳（大和）車塚古墳（備前）
６号鏡	吾作銘四神四獣鏡	（大和）、西求女塚（播磨）中小田（安芸）
７号墳	文帯八神四獣鏡	奥津社古墳（尾張）

② 武具の冑は中国製と考え、椿井大塚山古墳（大和）からも同様のものが出土しているので、これも威信財と想定している。武具を威信財とする風習は伊都国の時代には無く、ヤマト王権の影響が及んだ証拠としている。

（２）豊前宇佐赤塚古墳

宇佐神宮の北に位置する赤塚古墳は川部・高森古墳群に属し、現在は「宇佐風土記の丘」として整備されている一角に存在する。構築は３世紀末と考えられており、三角縁神獣鏡や管玉などを出土していて、岩塚山古墳と同世代に位置付けられている。氏は岩塚山古墳と同様に纒向型古墳とはしないが、出土した三角縁神獣鏡が椿井大塚山古墳と同范であるため、ヤマト政権との関連が深いとされている。

しかし、纒向型の元祖の纒向岩塚古墳からは三角縁神獣鏡は出土せず、そもそも三角神獣鏡がヤマト王権の下賜品であること自体が証明はできていない。さらに、最近の研究に拠ると舶載の三角縁神獣鏡は３世紀中頃から３世紀末まで輸入され、文様によって４段階に分けられる。岩塚山古墳出土の鏡はその内の第２段階から第４段階に該当し、壹與（台与）の時代（３世紀後半）にあたる。もし台与が九州に居たのならば全く逆方向の流通であった可能性もある。

３　舶載三角縁神獣鏡の傷

銅鏡にはコピーを作成の際に付く細微な鋳造ミスができる。このミスに着目した元福岡女子短大の藤丸詔八郎教授は、石塚山古墳の同范の鏡の傷の少ない順に

① １，２号墳鏡系列では、椿井大塚山古墳（大和）＜石塚山２号墳（豊前）＜赤塚古墳（豊前）＜天神の森古墳（筑前）＜石塚山１号墳（豊前）。

② ６号鏡系列では、万年山古墳（大和）＜椿井大塚山古墳（大和）＜西求女塚古墳（播磨）＜石塚山古墳（豊前）＜中小田古墳（安芸）。

となることを見出した。この並びはヤマト王権との関わりの深さとして説明がされている。

一見合理的な感じがするが、よく考えてみると少々おかしな点に気づく。

① このような状態に使用するには、まず、ヤマト王権が中国から鏡を一括購入して、出来の良い順に配布する必要がある。

② 上記の鏡の編年に拠れば、同一の箇所に時期をずらして複数回の下賜が必要になるが、どの様にして下賜する相手やレベルを決定していたのだろうか。

③ 従って、コピーは国内で行われ、コピー回数の増加に伴い傷が増えていったと考える必要があり、ヤマト王権の下賜説も根拠が危うくなる。

④ いつも上位に登場する椿井大塚山古墳はヤマトへの入口の木津川水系沿いに位置して水運で栄えた。傷の少ない良品を入手できたのは財力の差に拠る可能性が高い。

４　古墳の形と大きさの規制説

通説では前方後円墳はヤマト王朝から特別の許可を得た者のみが構築でき、更に規模にも一定の基準があり全体の調和を保っていたとしている。

しかし、全国の前方後円墳は５千基に及び、日本全国で造られている。どの様な仕組みで規制を行っていたのであろうか。また規模についても崇神天皇陵（行燈山古墳：242m）に対して吉備の造山古墳（360m）、作山古墳（286m）が存在して、規制を加えていたとは考え難い。

５　まとめ

以上、ヤマト王権一元説に基づく前方後円墳の展開説を眺めてきた。一連のストーリーは順序立てられており、一見非の打ち処が無いように見える。しかし、纏向型前方後円墳説を始め、古墳構築の展開がヤマトの勢力進展に伴い、地方に広がったとする説の根拠が希薄であることが分かる。

巨大な石を積み上げたり石棺を造るには専門技術集団の存在が不可欠である。それらの集団が地方の豪族の求めに応じて複数の箇所を渡り歩いて古墳を構築した場合、ヤマト王権の進展と結びつけて考えることは妥当であろうか。

初期の前方後円墳で最も西にある久里双水古墳（唐津市）の状況をみると、ヤマトより朝鮮半島との関連が深いことが窺われる。前方後方墳を一律に考えることに無理があるのではないか。筆者は先に「東海の古代235号」（2020年３月）で前方後方墳の展開を**「いずれかの集団が移住し、新しい地に故郷の埋葬形式を踏襲したもの」**と結論付けたが、前方後円墳についても同様の考え方を一部に取り入れる必要があろう。

古代において、ある国が他の国を支配することは**「被支配国から租税を徴収し、徴用などの使役を課すこと」**であり、４世紀においてヤマト王権が九州地方に対して前述の行為を常時行っていたとする記述は史書にも無い。

豊前地方は九州王権に属しながら準独立した勢力であった。勢力が独立性を強めるのは応神天皇期の５世紀前半とする説が有力であるが、今回の検討では４世紀にその傾向が現

れていると言える。また、瀬戸内海航路についても６世紀の継体天皇期に整備されたと考えられているが、４世紀においても限定的ではあるがヤマトとの交流の跡が窺われる。前方後円墳や三角縁神獣鏡が瀬戸内海沿岸の港湾都市と思われる地域に広まったのは海運に拠る可能性が高い。

前述の纒向型古墳の研究の中でC14の計測結果から一部の遺跡は２世紀後半にまで遡る可能性が指摘されているが、『魏書』の記述では「棺あれども槨なし」とされており、違和感を覚えるのは筆者だけだろうか。

歴史は先ず史実を前提無しで眺め、そこから得られる知見を基に仮説を立てるべきであり、ヤマト王朝一元説も九州王朝説も今一度原点に立ち返り眺め直すべきでは無かろうか。

土器文化と前方後円墳の広域性

名古屋市　石田 泉城

日本の土器文化は世界最古とされます。

旧石器時代は、無文土器で、その無文土器が出土する遺跡の代表例として、鹿児島市の横井竹ノ山遺跡、神奈川県綾瀬市の寺尾遺跡、青森県の大平山元遺跡があります。大平山元遺跡は16500年前とされます。また、縄文土器の原型は、隆線文土器(隆起線文土器）とされ、旧石器時代から縄文時代への過渡期の土器と考えられています。この隆線文土器は、長崎県の福井洞窟遺跡や泉福寺洞窟、神奈川県の花見山遺跡、新潟県の小瀬が沢洞窟や室谷洞窟などで発見されています。つまり、旧石器時代に続いて縄文時代においても、日本列島では各地に人の営みがあり、旧石器時代から縄文時代へと土器の文化は連続し、しかも列島各地で同じ土器の文化を共有していたとわかります。特徴がある日本の土器の共通性、それは１つの王朝が列島を統一していたからではなく、同じ土器文化が列島に広く行き渡っていたということです。こうした土器文化の広域性を踏まえると、前方後円墳（方円墳）についても統一王朝のものではなく埋葬文化の広域性であると考えられます。

前回の例会の内容

■ 尾張氏はどこから来たのか

名古屋市　石田泉城

尾張氏は、地元の笠寺台地が出自で、妹のミヤズヒメがヤマトタケルと縁戚になることで尾張の地盤を固めたと考える。

■ 尾張氏の源流を探る

一宮市　畑田寿一

宝賀寿男説をもとに尾張氏は４世紀初めに大和から尾張に進出し、先行諸氏と結びつき尾張を統一したと考える。

■ 尾張氏と熱田神宮主要摂社の奉斎氏族との関係について

東海市　大島秀雄

ヤマトタケルとミヤズヒメの話は熱田社の起源を説くことに意味があり、久米氏の尾張進出に関連していると考える。

■ 「正和四年卯月五日」について（３）と追記

瀬戸市　林　伸禧

五重塔銘文の横書き干支は近代に挿入されたもので正和年号は九州年号の可能性を否定できない。また真野長者に関わる伝承記事では、その死去年齢から二倍年令で記されていると考えられる。

例会の予定

■ 例会の予定

1　日時　11月８日(日)13時半～(第1集会室)
2　場所　名古屋市市政資料館
　　名古屋市東区白壁1-3、TEL052-953-0051
3　参加料　500円　（会員は不要）
4　交通機関
(1)　地下鉄名城線「市役所」、東徒歩８分
(2)　名鉄瀬戸線「東大手」、南徒歩５分
(3)　市バス「市政資料館南」、北徒歩５分
(4)　市バス「清水口」、南西徒歩８分
(5)　市バス「市役所」、東徒歩８分
5　駐車場　市政資料館：12台＋α収容(無料)

古田武彦先生とその学問に興味のある方ならどなたの参加も歓迎します。事前の参加連絡不要。例会で発表の場合は資料20部を用意ください。

■ 来月以降の例会　12月13日

会員の投稿について

■ 会報誌への投稿（編集担当：石田）
furutashigaku_tokai@yahoo.co.jp

■ 投稿締切り日　11月23日(金)